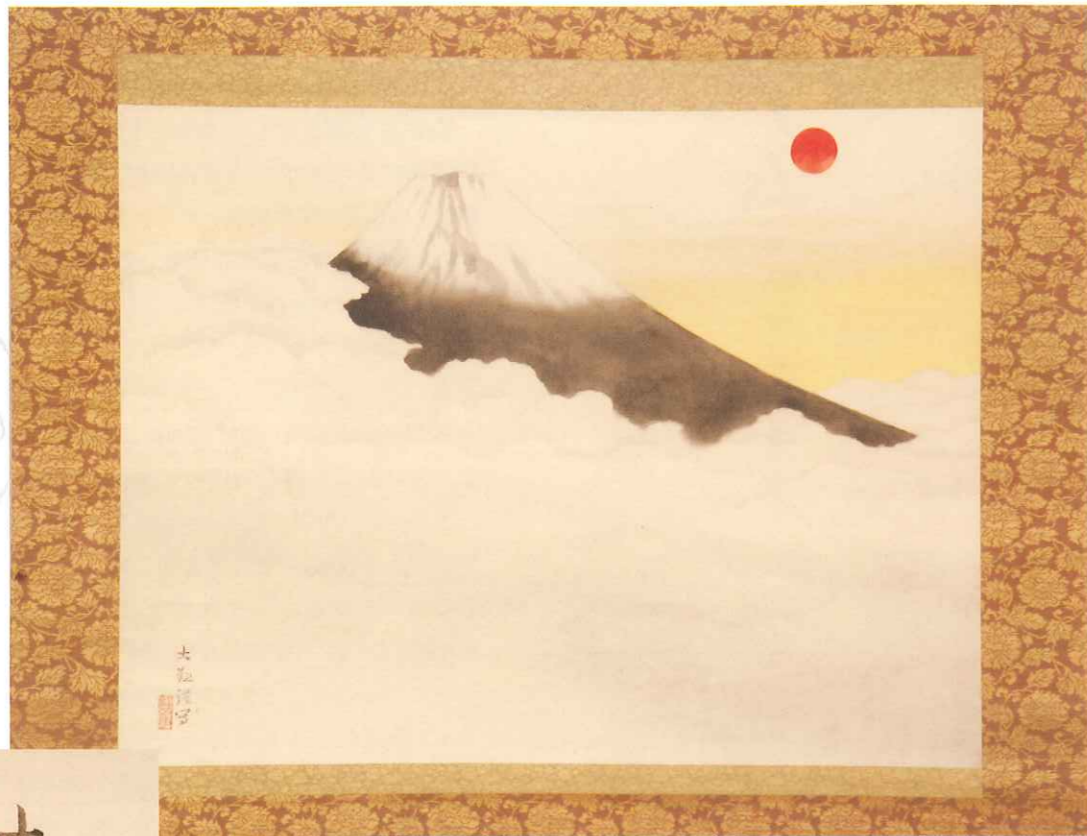


よこやまたいかん 横山大観筆「**霊峰不二**」(一幅)

Ⅱ期

昭和12年(1937)頃  
筑波家史料



(本紙:56.5×74.1cm)



富士を照らす赤い日は、朝日でしょうか、夕日でしょうか。大観が生涯に描いた朝日を通覧すると、必ず朱が施されています。大観にとって、赤く燃える日こそ、理想の日の出だったのではないのでしょうか。



2

広がる雲海に富士が頂をあらわし、日の出の空は黄金色に輝く——墨、朱、金のみを用いて、清々しくも堂々とした霊峰が描かれています。筆者、横山大観(1868~1958)は、生涯におよそ1千点以上の富士を描いたとされ、大観といえば富士の画家と認識されるほどです。大観は一体どのような思いで、富士を描き続けていたのでしょうか。以下、大観の言葉を引用します。

(前略)富士の形だけなら子供でも描ける。富士を描くということは、富士にうつる自分の心を描くことだ。心とはひっきょう人格に他ならぬ。それはまた気品であり、気はくである。富士を描くということは、つまり己を描くことである。己が貧しけ

れば、そこに描かれた富士も貧しい。富士を描くには理想をもって描かなければならぬ。

(大観「私の富士観」『朝日新聞』昭和29年5月6日)

すなわち本図の、限られた色彩や最小限に抑えられた筆致は、大観の理想とする心の富士山が象徴的に表わされたものといえるでしょう。

ところで、本図とほぼ同じ構図、彩色で描かれた富士が、昭和初頭から20年代にかけて数多く描かれました。さらに本作と同じ印章が昭和12年(1937)に使用されていることから、その頃の作例であると考えられます。また、署名に「謹写」を入れるのは皇室への献上品が多く、本作も山階宮家の伝来品です。

(助教 鎌田純子)

こくぶんゆう あきらしんのうさんそうぞう 国分文友筆「**晃親王三相像**」(一幅)

Ⅱ期

明治24年(1891)6月製作  
山階宮家史料

山階宮家初代・晃親王の劇的な人生の、大きく3度に及ぶ転向を「三相」で書き表した肖像画。

晃親王は、文化13年(1816)9月2日に、伏見宮邦家親王第一王子として誕生。文政7年(1824)落飾し、濟範と称します。ところが、天保12年(1841)数え26歳の時に西国へ無断出奔したため、その後16年間蟄居を余儀なくされました。長い蟄居生活の間、親王は勉学に励み、特に世界情勢の知識は深くその英明のうわさが広がります。元治元年(1864)、孝明天皇の勅命により還俗。孝明天皇の猶子として親王宣下、晃の賜名、山階宮の宮号を賜りました。その後、孝明天皇を援けて幕末の多事多難な時期に活躍。明治以降は皇族長老としてその役を果たしました。明治27年(1894)79才という高齢のため明治天皇から宮中杖を下賜され、同31年数え83才で薨去しました。

本図は、上段に20代の濟範と称していた頃の僧体姿、中段に49才で還俗し孝明天皇の猶子として親王宣下を受けた頃の直衣姿、下段に晩年期の皇族用大礼服をまとう姿が描かれています。下段の白ズボンの皇族用大礼服姿の晃親王と、ほぼ同じ姿形の肖像写真があり(挿図)、この写真をもとに絵が製作されたと考えられます。写真は、明治24年数え76才の時に撮影されたもので、本図も同じ年に描かれたことが落款から判明します。なお、同年9月23日勸修寺での彼岸会にあたり、親王自ら本図を同寺霊明殿におさめたことが知られます(『山階宮三代』)。

筆者国分文友(1823~1900)は、晃親王に仕えた絵師。本図製作当時、西洋からは写実的な画法が取り入れられていたものの、本図には岩絵具を用い、日本古来の伝統的な線描による肖像画法が用いられています。

(助教 鎌田純子)



(本紙:109.6×41.8cm)



山階宮晃親王の青年期・壮年期・晩年期の肖像画です。下段の絵のもとになった写真が伝存しています。写真や銅版画、西洋画法による貴頭の肖像が流行した明治半ばに、あえて日本古来の画法で描かせた点に親王のこだわりが感じられます。



(挿図)  
勸修寺紋付額入れ  
山階宮家晃親王肖像写真

3

Museum Letter No.17

Gokushuin University Museum of History

Museum Letter No.17

Gokushuin University Museum of History

